

打ち勝つ教会の建て上げ

有賀喜一

「教会成長」の父と言われたドナルド・マッギヴァラン博士は、「神の宣教の他に置き換えることの出来ない中心的な目的は、教会成長である」と言われた（Understanding Church Growth, Eerdman: McGavran.1970.p32）。

マッギヴァラン博士の言われた「教会成長」とは、先ずそれぞれの教会が質的成長（より聖書と聖霊に生き、共同体としての礼拝と個人的生活の家庭と社会生活の現場で生き生きとなり）、有機的成長（教会員相互の関係が深まり）、奉仕的成長（教会内、特に教会外の人々に対して福音を実際的に適用し）、そして量的成長（拡大—数量的に、拡張—親教会が子教会を生み出し、橋渡し—文化を超えた世界に宣教する、すなわち教会増殖）することによって、ある特定の地域が完全に福音化されることである（Understanding Church Growth, Eerdman: McGavran.1970 p15. JCGI ネットワーク、教会成長研修マニュアル、p12）。

そのような視点から教会を見るとときに三重の挑戦を受け、見直しを迫られるのである。

1 時代的挑戦

a 変革 1989年のベルリンの壁の崩壊に見られるようなヨーロッパでの共産主義からの脱却、西洋物質中心主義の荒野、麻薬悪用の横行、オカルト宗教の増大から、人々は政治的、文化的、そして教育的に真の卓越したものを求め、変革を叫んでいる。

b 優越性 人間機械化、科学万能の不信、実存主義の結果、生きる意味を失った人々が、改めて人生の意義深さ、より真実なもの、より優れたものを求め叫んでいる。

c 愛の共同体 お城のようなハウスは建っても、そこに温かいホームは無い。人間関係が失われて、親子の断絶、家庭の崩壊、人間不信の世である。誤った個人主義が横行して、すぐ「キレル」人間でいっぱいである。人々は偽りの無い本当の愛の共同体を求め叫んでいる。

この時代的挑戦に答えることができるのはまさにキリストの教会である。そのような教会となるためにも絶対見直しが必要である。

2 キリスト教界の挑戦

a 停滞群の教会 私がキリストに出会い救われた64年前と現在の教会礼拝出席者は大体33人と言われ、殆んど変わりはない現状である。停滞の連続である（キリスト教年鑑参照）。

b 衰退群の教会 プロテスタント宣教150年を迎えて日本伝道会議が北海道で開かれた。ゲストとして招かれ、ご講演された日本の主流派の指導者の先生が、「これからの

5年の間に500の教会が無牧となり、牧師の補充ができないことになる」と問題提起されたということである。日本の各教団、教派に於いても後継者の不足によって教会が衰退の危機にあるというのである。

c 成長群の教会 JCGI ネットワーク（旧日本教会成長研修所）のある教会は研修を受け、教会の過去、現在、未来と教会の霊的、実践的流れと霊的遺産の特徴を確認し、吹き始めた追い風によって新しい教会の戦略を見出して、方策化して、実践して、3年間に350人の受洗者が教会に加えられたと証しました。驚くべき成長である（沖縄リバイバル教会ケーススタディ資料参照）。

3 聖書的挑戦

a パラダイムシフト（視点の転換） 私がフラー神学校大学院の「世界宣教と教会成長」学部でマギャヴァラン博士から徹底して教えられたことは、パラダイムシフトすること、すなわち、神の視点、聖書の視点、効果的な宣教の視点から見直しをすることであった。私の生涯と奉仕に一大変革の始まりとなった。神による最高、最上、最善に生きることである（A Comprehensive reference volume on World Evangelization. Let The Earth Hear His Voice. World Wide Publications. The Dimensions of World Evangelization. McGavran: 1974）。

b 牧師の霊的権威 み言葉と聖霊によって、説教と奉仕に聖霊の実と聖霊の賜物が豊かに用いられ、神が計画された生きた教会が建て上げられ、21世紀に世界最初の教会として記録されている使徒の働きの教会が実現されているのである。そこには牧師の霊的権威が発揮されているのである（私たちにゆだねられた神の権威、クラフト、プレイズ出版、1999：p159-162）。

c 効果的な宣教計画 聖書には明確な理論と実際が提示されている。それと文脈化された特定の国、地域に適合したすばらしい生きたケーススタディがある。そこには原則と実践の効果的な宣教計画がある。

JCGI ネットワークの研修では、毎回、教会成長の神学的専門家とケーススタディの発表者が立てられているが、理論と実際の見事なチームワークであり、目からウロコの研修である（JCGI ネットワーク、教会成長研修マニュアル参照）。

本論

「打ち勝つ教会の建て上げ」とは

マタイ16章13節から25節において、イエス・キリストが建て上げようとされた教会は、

1 「イエスは主」との信仰告白に生きる人々によって成り立つ教会である。

- 2 ハデスの門において、その信仰告白に生きる人々によって成り立つ教会である。
- 3 失われた靈魂のために、戦う命令を受け留める人々によって成り立つ教会である。
- 4 ハデスの門に対して勝利を収める教会である。

このような「打ち勝つ教会の建て上げ」のために、パウロが書いた「キリストと主の教会」エペソ人への手紙から、教会の三次元的視点の転換（パラダイムシフト）を提案する者である。

- | | |
|------------------|------|
| A 教会の神的次元からの見直し | 1～2章 |
| B 教会の教会的次元からの見直し | 3～4章 |
| C 教会の実践的次元からの見直し | 5～6章 |

- A 教会の神的次元からの見直し エペソ 1～2章

先ずパウロは総括的な祝福の宣言から始めている。「私たちの主イエス・キリストの父なる神がほめたたえられますように。神はキリストにおいて、天にあるすべての霊的祝福をもって私たちが祝福してくださいました。」(エペソ1:3)(小島伊助全集4、聖書講解Ⅰ、小島伊助、いのちのことば社、p280)。この天にあるすべての注がれた霊的祝福の故に、パウロは、最初の祈りを捧げている。「あなたがたの心の目がはっきり見えるようになって」と。これは開眼の祈りである。その結果は、「神の召しの望み」(1:18a)、「聖徒の受け継ぐ嗣業の栄光の富」(1:18b)、そして「信じる者に働く神のすぐれた力」(1:19)について開眼され、実に教会の源泉は、神ご自身であることが明白となるのである。さらにパウロは展開して詳細に説明している。

1 父なる神の働きとして、エペソ1:4-6で、選び(1:4)、定め(1:5)、恵み(1:6)で栄光を現してくださった。

2 子なる神(キリスト)の働きとして、エペソ1:7-12で、御子の血による贖い、すなわち罪の赦し(1:7)、キリストにある一体化(1:10)、御國の後継者(1:11)としてくださった。

3 聖霊なる神の働きとして、エペソ1:13、14で、福音を聞かせ(1:13a)、福音を信じさせ(1:13b)、聖霊による証印(1:13c)を押してくださった。

このように教会の源泉は三位一体の神ご自身であり、神の御心はすべての人の救い(Ⅰテモテ2:4)、ひとりとして滅びることがない(ヨハネ3:16b)ことであれば、教会には無限の可能性が神にあることを知るのである。

教会の神的次元からの見直しは、先ず教会の源泉としての三位一体の神による見直しで

あったが、更に教会の素材として、この神によって新創造された者たち、すなわち三重の救いに与った者たちによるのである。

4 引き上げる救いと言う神の新創造（2：1－10）

霊的に死んでいた者（2：1）、この世、サタン、そして情欲の奴隷となっていた者（2：2）、生まれながら御怒りをうけるべき者（2：3）が、キリストの十字架による大逆転（2：4－10）で、恵みの故に、信仰によって、永遠の滅びの中から引き上げられ、キリストとともに天のところに座らせていただけるとは、ただ神ご自身ができることである。

5 近づけられる救いと言う神の新創造（2：11－18）

キリストから離れ、何の特権もなく、約束の契約とは無関係の他国人であり、この世にあって望みもなく、神もないという、遠い存在であったものたちが、キリストの血によって近い者とされたのである。すべての特権、顧み、祝福が加えられる者となったのである。

6 神の家族として一つにされる救いと言う神の新創造（2：19－22）

神の家族となったすばらしい愛の共同体、神の臨在溢れる聖なる宮、神の御住まいとして地上の天国がいつも息づいているとは、まさに聖霊なる神の著しい超自然的なお働きである。

このように教会の神的次元からの見直しによって、教会は実に三位一体の生きた神ご自身が源泉となり、教会の建て上げのための素材として、新創造された一人ひとりを用いて、新しい生きた教会を建て上げられることを確信するのである。

B 教会の教会的次元からの見直し エペソ 3章～4章

1 神によって明らかにされた教会の使命 3：1－13

パウロはこれを「奥義」（3：3、4、5、6、9）と呼び、恵みによる務め（3：2）、啓示によって知らされ（3：3）、歴史的背景があり（3：5）、やがて完結して異邦人がユダヤ人とともに共同の相続者となる（3：6）ことであると記している。しかもこの奥義は世々神の中に隠されていたが、今や実行に移す務めとして教会に与えられていると明言しているのである（3：9）。すばり教会の使命は、宣教である。教会の存在理由は、神が必ず完成される神の国の実現に向かって、私たちがひたすら福音の宣教に生きることである。その為には、礼拝を通して全聖徒が整えられて、月曜日から土曜日までの日常生活の現場で人々を主に導く現場牧師になることである。

2 「内なる人の強化」で実現の祈り 3：14－21

先に開眼の祈りを捧げたパウロは、ここで教会の宣教の使命を十分果たすために、実現の祈りを捧げているのである。祈りの結果、信仰によってキリストの内住を体得し（3：17）、すべての聖徒とともに絶対愛に生き（3：18）、神ご自身の充滿にまで満たされ

る(3:19)。このような整えをいただくならば、必ず教会の使命は全教会を挙げて実践できるのである(3:20、21)。

3 教会の本質 4:1-16

a 教会の一致 4:1-6

「御霊の一致を熱心に保ちなさい」(4:3)とあるように、三位一体の神ご自身がそうであるように、一致は、生命的、有機的、そして統合的である(4:4-6)。

b 教会の多様性 4:7-16

キリストの賜物(聖霊の賜物)による多様性が、エペソ人への手紙以外の記事とともに、合計20挙げられている。預言、奉仕、教え、勧め、分け与え、指導、慈善(ローマ12:6-8)、知恵、知識、信仰、いやし、奇蹟、霊の見分け、異言、異言の解き明かし(1コリント12:8-10)、そして使徒、預言者、伝道者、牧師、教師(エペソ4:11)である。これらの賜物は、それぞれ生来の個人的な能力や訓練によって造り上げたものと共通しているもの、全く関係の無いもので超自然的なもの、また神の特別な召命によるものなどに分けられるが、多くの信徒が既に与えられている賜物を発見し、積極的に用いるところに教会の閉塞感は完全に除去することが出来ると信ずる者である。

c 教会の成長 4:12-16

前にもマッギャヴァラン博士が指摘されたように、教会の成長は、キリスト者の成熟という質的成長、教会のうちに向かう有機的成長、教会の外に向かう奉仕的成長、そして数量的に各個教会が増えることが、拡大的成長、子教会を生み出していく拡張的成長、そして文化を越え、言葉を越え、民族を越える橋渡しの成長の四つの成長要素が考察されている。

C 教会の実践的次元からの見直し エペソ 5章~6章

1 キリスト者の個人としての歩み 4:17-5:21

キリスト者の個人としての歩みの前提は、「古い人を脱ぎ捨て、神にかたどり造り出された新しい人を身に着るべきことである」(4:22-24)。その故に、神に愛されている者として、愛のうちに歩むこと(5:1、2)。光の歩み(5:8)、賢い歩み(5:15)を教会内、教会外を問わず、常に生きることが教会の実践的次元を満たす第一のこととなるのである。

2 キリスト者の家庭人としての歩み 5:22-6:4

教会での主日礼拝、教会内部での歩みは、家庭人としても妻を愛する夫、夫に従順な妻として証しされ、また各家庭の中で、父と子の関係も、ともに天国の前味を地上で味わうような実践が、教会の実践的次元を満たす第二のことである。

3 キリスト者の社会人としての歩み 6:5-9

キリストのしもべとして（6：6）、心から神のみこころを行い（6：6b）、主に仕えるように（6：7）、人々を祝福し、交わり、祈り、神の国があなたがたに近づいたと、福音の社会的適用が教会の実践的次元を満たす第三のことである。1995年からジョージ・オーテスの世界宣教調査の結果、ある特定の町、市、地域、国家でクリスチャン人口が75～95%になって、政治、教育、実業、農業など全領域で大変革が起きているということである。95年代は、世界で25箇所だったのが、今では1000箇所に浸透しているということである。驚くべき神の国の浸透である。

このような力強い教会の実践的次元を満たすのは、聖霊の充満である（5：18）。

D 教会の完全勝利 エペソ6：10～20

パウロのエペソ人への手紙を通して、教会の維新と刷新のために、神的、教会的、実践的次元から視点の転換を進めて来たが、最終的なパウロの主張は、教会の完全勝利の確信である。霊的戦いは現実である。悪魔も彼の動きも現実である（6：12）。しかも策略を持っている（6：11）。主権、権威、力、そして支配者である（6：12）。「エペソ人への手紙の結論が空中戦、天の所の戦いであることは、実に驚くべきことである。メリー・ベーズレーの「悪魔の悪だくみ」という著書があるが、日本のキリスト者は、あまり悪魔に関心がないのか、また天のところに上らず、そこにも座していないので、悪魔と遭遇しないからだろうか。エペソ人への手紙を学んで、悪魔との戦闘がわかることはお互いに必要であり、また幸いなことである」（小島伊助全集4、聖書講解Ⅰ、いのちのことば社、1983：p280）。

そこで聖書は断言する。「神のすべての武具をとりなさい」（6：13）。「腰には真理の帯、胸には正義の胸当て、足には平和の福音の備え、信仰の大盾、救いのかぶと、御霊の剣（神のことば）を取り、すべての祈りと願いを用いて日常生活においてキリストから引き離し、教会の使命を妨害しようとする悪魔の勢力に完全に打ち勝ち、主にある共同体全体、教会全体が勝利すると言うのである」（平和の神の勝利、霊的戦いの聖書神学、山崎ラッサム和彦、プレイズ出版、p56）。

カルヴァンは言う「パウロがわれわれに恐るべき敵を提示するのは、われわれが恐怖で取り乱すためではなく、むしろわれわれの注意と配慮とを鋭くするためであり、両極の間になにかがなければならぬのだ。つまりわれわれが敵を軽視すれば、その呑気さのためにしばしば奇襲され圧倒されてしまうことになる。一方また、恐れや驚きに心を奪われれば、打たれない先に征服されてしまうであろう。パウロはこの両極の間の道をとるために、われわれの敵の強力さを語って、われわれがそのためにより敏捷に熱心になるように、わ

れわれの心を動かすのである」(カルヴァン・新約聖書注解 X、エペソ、新教出版社、1963 : p267)。

アメリカのフラー神学大学院、キリスト教指導者論の教授、ロバート・クリントン博士は、JCGI ネットワーク(旧日本教会成長研修所)創立10周年記念講演で、「未来完了形思考」(Future Perfect Thinking,1991)を紹介された。聖書信仰に堅く立つ者であるならば必ず神の救いの歴史は、全宇宙的、政治的、経済的、技術的、宗教的、道徳的、教会的にすべての点において完成されると信じるものである。その未来の出来事は決定的である。これを未来完了形で信じるのである。この指摘は私の確信となったのである。

そして神が過去において著しい事をなされた時の特徴を次のように挙げられたのである。

- 1 人々が突然に、今まで否定的だったのに、受容的になること。
- 2 新しいキリスト教の形が生まれ出されること(新しい形のリーダーシップ、新しい奉仕の構造、例えば、中国での家の教会方式、ラテンアメリカでの力の伝道など)。
- 3 短期間の大きな霊魂の刈り入れ。
- 4 超自然的力の解放。

今、日本においても、未来完了形思考に立って、キリストご自身が建て上げたい教会を、しっかり見直しをして着手していこうではありませんか。

その実践のためには、JCGI ネットワーク・教会成長研修会で生まれ出された「教会成長8原則」を紹介し、是非研修していただきたいのである。①ヴィジョンと祈り、②効果的な牧会、③実践的な理念、④主の弟子の養成、⑤霊的賜物の活用、⑥霊と真による礼拝、⑦セルグループによる教会形成、⑧教会開拓の8原則である。この研修が実践されて、既に日本各地で、全国平均の6倍で教会が成長している事実が証しされている。やがてそれぞれの地域社会まで変革され、神の国が実現されるよう祈りつつこの提案を結ぶこととする。

(全日本リバイバルミッション代表、リバイバル聖書神学校名誉校長、
JCGI ネットワーク理事長)

JCGI ネットワークについてのご案内：ホームページ：

<http://www③.macbase.or.jp/~lifejcgi/>

アジアアクセス JCGI ネットワーク山形事務所

990-0067 山形県山形市花楸1-2-12 ロイヤルビル

Tel 023-626-3326 Fax 023-626-3327

Email lifejcgi@macbase.or.jp

理事長 有賀喜一 総主事：川崎 広